

私はずっと「存在」というものが気になっている。

東日本大震災の翌日のニュースで多くの人間があっけなく死んでいく様を見て、生きているはずの自分の輪郭がぼやけていく感覚があった。あの人と自分の違いは何だろう。そして今この時代でも毎日どこかで誰かが死んでいる。私は自分が存在していることが不思議でたまらず、存在の確固たる何かを探そうとして、きっと彫刻をやっている。

しかし存在に確固たる理由などないらしい。全ては偶然やら運命やらの、途方もない確率の積み重ねの結果であり、地球の生態系の中での代謝の流れの一部でしかない。生きていることに理由なんかない。けれども存在に理由などなくとも存在していること自体は確固たる事実である。今この瞬間、私が、あなたが生きていることは事実である。これは私が実材を用いて制作する理由に直結すると思われる。

感覚的に素材として土を使っているのはどうやら理由がある。実材にも様々あるが、私にとって木は木のまま、石は石のままで良いらしい。存在として既に完成しているように感じる。しかし、土は自然物として存在しているにも関わらず、水のように流動的であり明確な形態を持たない。そして焼いて固めれば石のように恒久的に形を留めることができる。また、木や石は道具を介さないと形をつくることはできないが、土は素手ででも形成ができ、ある種身体の一部が素材と一体化するような感覚にさえなれる。しかも土は大きく言えば地球の表層を覆う要素であり、超自然的歴史をはらむ素材であるといえる。つまり土は地球での大きな要素でありながら、身体で直接形成することができ、流動的故に瞬間的な心身の衝動を受け止め、形として留めることができる実材なのである。

私はそんな素材で「存在」の形象化を試みる。

物質として存在するという事は場所、空間、量を伴う。そしてその中には非物質的なものも存在していると感じる。それは命や魂と呼ばれるものなのかもしれないが、私はその内的エネルギーを多くの自然物に感じる。人間が生まれる前から存在する、木や石や山や海などの生命というものを根幹から支えているようなものほどそのエネルギーを強く感じることができる。いわゆる超自然的存在というものかもしれない。それぞれ形は違えど質としては同じような、「存在」の本質みたいな何か。私はそれに惹かれ、畏怖し、焦がれているのである。

それは人間の中にも存在しているはずであるが、それは他の自然物に比べて大変乏しく感じる。しかし、例えば山や海を前にして一人としてではなくただの一個の生命として自分を自覚したとき、私は自分の中にも超自然的存在を感じることができる。その時感じるのは、自分の人格と命自体は別のものだということである。命自体に人格や人間性はなく、根源的超自然的存在と繋がっている。私はそのエネルギーを形にしたいと思っている。それが「存在」の本質に繋がっていると感じているから。そしてそれを物質的存在として形にできたなら確固たる「存在」の証明として成らないだろうか。

私の彫刻に具体的な意味や理由などないが、無意味であるものが存在する意味を持てばいいと思っている。ただ存在することが許される、在るようにただ在ることが許されればいいと思っている。

寄る辺とは、身を寄せる所・頼りとする所、という意味である。

私がつくりたいものは無意味な存在の寄る辺なのだと思う。